

# 第六次夏季講習會公告

一、會場 相州片瀨 龍口寺  
 九月一日より七日迄一週間  
 二、會期 每日午前八時より十一時迄、午後四時より六時迄 但時宜に依り變更する事あるべし  
 三、會費 僧俗男女を問はず會員章所持の者  
 四、會費 金壹圓(臨時聽講希望の方は一日毎に金廿錢) 但學生及び軍人に限り半減の事  
 五、會中、交名茶話會、靈蹟巡拜會、公開講演會、有志懇現會等を催ふす  
 六、泊味 片瀨及び江之島に指定旅館あり、一泊金五拾錢、晝辨當金拾貳錢、龍口寺内宿泊者は一日賄料金五拾錢以内  
 七、交通 東海道線藤澤驛又は横須賀線鎌倉驛にて下車夫より片瀨迄電車の便あり  
 八、南無妙法蓮華經  
 九、齋關主義  
 十、日蓮主義の使命  
 十一、鎌倉の役と日蓮上人  
 十二、未定  
 十三、宗教と國家及政治  
 十四、日蓮主義の感化事業  
 十五、最近思潮と日蓮主義  
 十六、人法一如  
 十七、未定  
 十八、顯密判の大要  
 十九、リチャード博士の法華經觀  
 二十、日蓮上人の背景

- |        |     |     |
|--------|-----|-----|
| 權僧正    | 井村日 | 威甫君 |
| 權僧正    | 石橋日 | 生甫君 |
| 大僧正    | 本多日 | 恒生君 |
| 陸軍少將   | 小原正 | 君君  |
| 權大僧正   | 脇田三 | 君君  |
| 法學博士   | 山田三 | 君君  |
| 東京感化院長 | 松林一 | 君君  |
| 文學博士   | 小崎正 | 君君  |
| 文學博士   | 姉崎元 | 君君  |
| 唯一佛敎團長 | 箕作元 | 君君  |
| 慶應大學教授 | 清水元 | 君君  |
| 文學士    | 柴田一 | 君君  |
| 文學士    | 守屋一 | 君君  |

## 講師及講題

(順はろい)

# 軍國民の精神修養

大僧正 本多日生

九 月 號

號五十三百二第

# 統一

大日本帝國と日蓮上人

唯一佛敎團長 清水梁山

## 戦と死

三上義徹

賴春水の人格

記者

林將軍を喪ふ

記者

# 近代文明と帝國の天職

文學博士 姉崎正治



# 縮妙法華經並開結

第壹種 紙裝 正價金貳拾錢 郵稅金四錢  
第貳種 布裝 天金 正價金拾五錢 郵稅金六錢  
第參種 皮裝 三方金 正價金八十錢 郵稅金六錢

急

▲法華經は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸、思想統一の最高指針なり、現代思想界の紛亂其極に達し、結歸する處を知らざるに當りては、須らく法華經の研鑽を獎勵せざるべからず、然るに世流布の經典其類多しと雖も、或は其價貴く、携帶に不便に、或は文字細微に過ぐる等、求道の士をして満足せしむるものなし、いま本書は此等の不利不便を除き、菊半截判として携帶を便にし且其價を廉にし以て汎く一般に供給し本經の普及を圖らんとするもの、既に初版數千部を頒布し終れり、依てこゝに再版印行したれば一刻も早く座右に供へられよ

告

△文明人は最高の思想に接觸するに在り、法華經は最高の思想也、我等は何事を措いても本書を讀まざる可らず、本書を備へざるは文明人としての恥也

東京市淺草區北清島町十四番地

統一團

振替口座東京一二二九番

# 戦と死

(1)

『殺す勿れ人は互に相愛すべきものなり』とは、平和主義を標榜する基督教徒の非戰論である、『殺せよ敵の肉を屠りて自由を失はしめよ』とは、戰に於ける突撃の聲である、殺す勿れとは、何れが眞理であるか、あまりに矛盾衝突の甚しき思想である、殺す勿れとは、絶対の平和主義より出でたる非戰論であつて、宗教上より考察すれば眞理なるが如しと雖、されども對立國家の存在する世界の現狀に於て、戰爭と云ふ事實を絶対に否定することが出來得べきものであらうか、戰爭は無殘なる人殺しを敢てするものであるから、文明人の爲すべき仕業でないといふ非戰論者の主張は、強ち無理ならぬ道理の存することではあらうけれども、獨立國家の對立せる場合に於て、競争、自衛は必然の理數であつて、何れも最後の決勝點に進まんとしてあらゆる手段を講ずるは、亦已むを得ざることはあるまいか、人間の生存する世界に其領土を異にして居る以上は、國防を撤したる絶対の平和は實現し得べきものであるまい、現在の平和の程度は競争の間に維持せらるゝので、人道論者の唱ふる平和主義は、世界が一領土



權内に統一せられたる秋でなければ、全く戦争てう悲劇を撤廢することは不可能である、何ぞ知らん文明は猛烈なる競争の結果である、進歩は劇甚なる戦闘の賜である、さればこの競争に打勝たんとするには、國家必然の自衛として適當の設備を爲すは理不盡の事ではない、即ち一面には武力的に軍備の充實を期して競争の大決戦に備へんとする、蓋し之れ國として正當の施設である、何を以てか戦争は人道の敵なり博愛の本旨に背くものなりなど、不徹底の論議を迂鳴り居るや、視よや人生は是れ陶汰の行はれつゝある一大戰場ではないか、世界の文明史上に於て、いかに猛然たる突撃戦が行はれつゝあるかよ、既に物質の上に精神の上に一大戦闘の火蓋は切られて、刻々肉を飛ばし血を流す底の激戦は續行せられて居るのである、而して精神的戦闘は、人自身の内的生活に繋がる重大なる問題なるも、自覺なき人々は自己の利害に關せざるが如くおもふて居るも無理はないが、武力的戦闘は劍を把りて人を殺し、また敵に殺さるゝの凄慘を極む、所謂戦ふと云ふ背後には必ず死と云ふ問題が付き添ふて居る

▲死は實に人生の重大問題である、生は人の欲する所死は人の忌む所である、然れども戦争は人の肉を屠りて之を殺せよ、亦自からも勇奮して死せよと令する、戦争とはこの事實を言ふのである、このたび歐洲の動亂に際して我皇の宣戰を發し給ふや

他の國が道義の原則を無視し人類の平和を侵害するの不義非望の振舞あるに由り、この道義と平和を確保する正當の防衛として、之が膺懲の行動を爲すは正義擁護の爲であつて、統一的天業の使命遂行である、日本帝國の正當の防衛として爲すべき戦ひなるが故に戦ふのである、歐洲の戦雲は遂に東洋の天地を蔽ふて、日本帝國の利權を傷けんとする、一國の興亡に繋がる防衛として皇帥を起したのである、日蓮上人の愛國的赤誠に「一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事也」とあるが、國の利權を抑制せらるゝ時あらば國民舉つて奮ひ起たねばならぬ、然れども斷じて帝國主義の意味を包んで戦を宣すべきものでない、日蓮上人の主張せられたる慈悲の結晶したる折伏の戦ひでなければならぬ、平等救済を目的としたる戦ひなることを要する、而してこの戦ひに於て、人生の花盛りなる壯丁に對し、正義のために潔よく死すべきときに死せよと命ずるのである、亦自から進んで自由の意思を以て死に就くのである、死すべき時に死すと云ふ事は死の價直をして一段の重みを加ふるものである、死生は宇宙の原則である、如何なる人なりとも生るゝとき早や既に死すてり條件を以て出てざるものはない、人の生活をおくり行く時間は、刻一刻死に向つて縮まつて行くものであることは否定するを得ざる事實である、人は何時死ぬるか、また死の斷未甞は如何様であるか



は分らぬけれども、總ての人は必ず死なねばならぬ運命を持つて、いま現に人間の世に人間として生きて居るのである、人間として生きて居りながら碌々として何等人生に貢献する處なく、肉的享樂を恣にして最後棺桶に入れらるゝことは、誰しも人間本來の性質及目的から考へて、いかにも愧かしい所であるから、こゝに於てか、人は如何なるものであるかと云ふ自覺に立ちて

#### ▲光輝ある死

を遂げんことを思ひ、如何にせば自己の永久存在を實證せんかと考察せざるものはない、光輝ある意味を死と云へる事實に添へんとする、此時に於て、戰爭は其國民の總てに對して決死を要求する、中にも軍人は劍を提げ銃を肩にし、砲煙彈雨の間に働いて國家先天の使命を行ひ、人々相食むの悲劇慘狀の裡に潔よく戦死を遂ぐる、戦死、是れ光榮ある人生の終局である、嘆くを止めよ、人は死すべき時に死せざれば死に勝る恥ありとは、先覺者の教ゆる所にして死に對する決心用意である、人はつねにかゝる信念を養ふて死すべきときに笑つて死なねばならぬ、意義なき最後は人の恥づる所である、さればいまこゝに

#### ▲一死國難に當る

ことを得るとせば、死もまた偉大なる價直を有するではないか、我皇民は對立國家の上に立つて、最後の統一權を發現すべき天業を遂

行するものである、國民齊しく力を協せて國難退治の衝に當るの幸榮を擔ふものである、漫りに誤れる非戰論を唱へて戦死の意義なきを笑ふものゝ如きは、明かに我建國の理想實現の運動を傷くるものである、之等は不忠なる非國民である、我皇の宣したる義の爲の戦は、天の命じて以て邪義非道を膺懲せんが爲である、法華經にはこの内証を示して「轉輪聖王の威勢を以て諸國を降伏せんと欲せんに、而かも諸の小王其命に順はざらん時に、轉輪王種々の兵を起して往て討伐す」とある、されば日本の國民はこの義のために挺身奮戦せねばならぬ、義は天地貫串の秩序である、秩序の破壊は天地と人との敵である、人類の共同生存を蔑みするものである、茲に天權を有する我國が秩序維持のために義軍を起したのである、かるがゆへに忠愛の武夫は笑て戦死に就くのである、義は泰山より重く身は鴻毛よりも輕しとは、二千年來訓練せられたる國民の精氣である、身輕法重死身弘法とは、六百年前日蓮上人の色讀せられたる殉道的生氣である、日本人はいま正にこの精神を體現身讀すべき機會に到達して居るのである、故に死を以て國難に當らねばならぬ、然らば

#### ▲死とは

其性質何んなものであるか、死とは精神と肉體との分離である、肉體が精神より享けて居つた活動の力が無くなつた時、人間的肉體の運動が全く停止し



た事實が即ち死である、それ故に死は人間の生活を奪ひ去るものではあるけれども、死と共に個性の一切は空無に歸するものでない、吾人の自我は久遠以來實在であつて過去より發展し來つた現在の生命である、この現在の自我生命は死と共に亡ぶるものでなく、將來に向つて發展し行くもので、永久に實在にして亦不滅である、故に生命の發現は將來に無限の感化を残して行くのである、肉體が灰となつたから精神は何處へ行つたか解らぬなどと云ふのは愚論である

▲精神は不滅である さうしてつねに活動を續けて居る、楠公が七たび人間に生れて國賊を滅ぼすと云ふ忠愛の赤誠は、精神の不滅を實證するものである、よしや戰敗れて敵の矢に中りて瘡るゝとも、忠臣の精神は永久に忠臣として生きて居る、反逆の思想はいつまでも反逆の思想であつて打ち消さんとするも出来るものでない、いまや日本の軍隊が敵の港灣封鎖の任務を行ひ、砲火を交へて膺懲の事に従ひ、壯烈なる戰死を遂ぐる武士は、君國のために一身を捧げたる名譽を擔ふたるもの、その忠愛は千載に傳はつて朽ちざる力を有するのである、即ち生きては忠義の人となり死しては護國の鬼となるとは、正しく戰死者の色讀せる文字である、戰死者の英靈千古にその忠愛の光りは輝いて永生不滅の生活に入ること疑ふべくもない、それ斯の如く戰ひは死と云へる事實に無限の價直を與へ、死は戰ふて以て正義を擁護する、人生碌々斗屑の生涯を送るもの多き中にも、自己の休戚を離れて道の爲國の爲に死す

るは、眞に博愛の權化である、佛敎に示せる菩薩行を積むものである、戰ひよ大に戰ひよ、いまの戰局は或時間の到來と共に終りを告げんも、帝國の宇内統一の使命を果さんそれまでは、世界における戰爭行爲は絶対に絶滅することは出来得べきものでない、されば武力的防備を嚴にすると共に、内國民は耐忍持久の精進力を訓練するを要する、貧弱なる内的生活は精進の力を衰耗せしむ、須らく宗教及正義の權威を尊重して、爾自身の内部生活を豊富ならしめよ、然らば則ち精進の力は充實するのである

進めよ退く勿れ、武力の上にも經濟の上にも思想の上にも、精進の意氣を以て努力し、健全にして優勝なる文明を作り上げねばならぬ、日蓮上人の「日は東より出て、西を照す」とは即ちこの謂ひである、日本の國民は、つねに戰と死との覺悟をもつて建國の天業に参加することを忘れてはならぬ、この天業の遂行に従ふものは猛進的なるを要する

「日蓮大兵を起してより二十餘年未だ一度も退く心なし」

とは、軍國の民に教へたる警訓である、いでや、正義を蹂躪する敵人輩を片つ端より斬り捲つて、潔よく國の爲に戰死せよ、思想を掻き乱だす惡魔の軍勢あらば、大折伏の鼓を鳴らして道の爲に戰死せよ、戰ひよ敵恐るゝに足らず、死せよ吾が生命は不滅である。



# 軍國民の精神修養

大僧正 本 多 日 生

人の心と云ふものは、一體何んなものであるか、およそ人としての立派な道徳的の行は、必ず人の心の上に通ずるものである、之を建築に譬ふれば、心は地盤の様のものである、地盤が堅牢でなければ如何に建築をしても危険である様に、人が心の上に美しい道徳の建物を造るには、第一心の動搖せぬやうにする事である、若し心が動搖して居つたならば到底完全なる道徳は顯はるゝものでない、故に心の動搖と云ふことを防がねばならぬ、人の身體には直立不動の姿勢を取ることは出来るが、人の心をして直立せしむる事は餘程困難である、人の心は波の動く様なもので、精神修養の出発點は心に波の打たぬ様にする事である、時間に於ても空間に於ても人の心が波立たぬ様になら

ねばならぬが、それは容易ならざる事である、人の心は渦巻の様になり横からも動搖して居るものである、この動搖する心のまゝにては道徳は實行し得られないものでない、昔から精神上の教訓に就ては、人の心の中には明德と云ふてお月様の様なまん丸い光あるものがあるが、水が波立たねば美しき姿が映るが、波が立つと其美しき光は水の上に映らないて金を流したように見える、お互の心もその通り、我々の心の波を鎮めると月の光の如き明德が顯はれて来るのであります、この心を鎮めるには専注と云ふて心を一處に引集めると云ふことをせねばならぬ、碁杯を打つ時には随分専注する人があるが、清き道徳の事には専注し難きものである、元來が動搖すべき性質である處に、それが世の

中の事情に依つて一層動搖する事が烈しくなる、世の中に人の心を惑はせる様な思想が澤山あつて人の心を誘惑するから、無理鎗に押さへ付けても直ぐ動搖するのである、精神修養を書いた書物の中にも人の心を動搖さす様なものが少なくない、又學問上の議論許りてなく人の心の中には感情と云ふものがあるが、其中の劣等な感情が起つて下らぬ考が斷へないものである、人の精神は時代と共に移り替りて段々と慾望が強くなる、文明とは一方から見れば慾が強くなることである、内面よりは心自から迷を起し、外面よりは心を動かして種々の誘惑が盛に起つて来る、内外相應して心の慾を強くする様な譯で、之が人の精神を動搖さす根元と爲るのである、この慾が基と爲つて人の心に疑の心を生ずる、其疑が心の波である、今の時代は懷疑の時代で誠に疑の多い時代である、國民は國民思想を疑ひ、軍人は軍人の本分に疑を懐くものを生ずる、國民一般が自分共の仕事に疑を懐いて居る様な時代である、此は現代の憂である

英國のグラッドストーン卿は近代比類なき大政治家であるが、最初は宗教家になる考であつたが、父の言葉に従ふて政治家と成られた、けれども宗教家の考を以て政治を行つた人である、此人が自分の子供に與へた書面の中に「今の世の中は誠に薄べらな懷疑の時代である、此時代に於て人間が自己の職分を全ふるに當ては、何事よりも最先きに此懷疑の心を打捨て、自分の仕事に確固たる信念を注いで進まねば、學問も何にも役に立たない」と云ふことを懇々教へられて居るいかにも其通りで、キマツキツタ事柄でも疑の心が生じたならば一つも進歩すべきものではない、故に其疑を除かねばならぬ、軍人として忠義を盡くさねばならぬと云ふ事は言ふ迄もなき事でありますが、何の爲めに忠義を盡くさねばならぬかと云ふ様な疑が起つて来る、そうなるると軍人精神に曇がかゝつて光がなくなるのである、故に其疑の雲は之を取除かねばならぬ、其疑を除く爲めには忠義の必要なることを能く心得ねばならぬ、精神教育の大切なことは茲にあ



る、人は自己の理性に満足し得れば疑は全滅するものである。

そこで忠義の心とは如何なることであるか、我國建國以來の國民道德の精神、言葉を換へて言へば大和魂が即忠義の心である、此心は世界文明の中に最高なる道德であつて有ゆる道德を纏め、人間の有ゆる善行美德を集めた最高の道德である、之が忠義の心である、吾國民は一人も残らず此尊き心を持って居るから強いのである、單に日本人なるが故に忠義の心が大切であると云ふ計りてなく、外國でも若しも國家の組織が完全ならば忠義の心が起るべきである、其組織が不完全であるから斯う云ふ尊い道德が起らないのである、大和魂は如何に外國人が研究しても分らないのである、富士山の崇巖櫻花の秀麗は外國に無いが如く、日本人の心の中に咲きつゝある忠義の花は世界の道德に冠絶して居るのである、學者の中では世界の學說を以て我國民道德を疑ふものがあるけれども、我大和魂の眞價は小説杯をヒネクツて自然主義や享樂主義を囀づる三文文

學者の了解し得べきものではない

さて忠義の心は何故尊いか、細い理窟は知らぬてもよい、我々日本人は一切の理想一切の道德を顯はすには凡て國家の力を通して顯はし、國の力を通して世界文明の上に貢献せんとするのである、故に日本人の考へた事は一人々の力ではなくて斯く結合して顯はす所の道德である、建國以來二千五百餘年の久しき同相濟にせし國體の精華を我國の道德とするのである、日本人は總令學問の力はなくとも理窟は分らなくとも億兆一心の結合力を以て世界に進んで行くと云ふことを生れながらにして知つて居るのである、各自の家庭に於て丈夫のことは覺へて居るべきである、日本人にしてこの關係の道德が分らんと云ふ様なことは餘程のボンクラと云はねばならぬ、若しも此點に就て疑の心が起るならばそれは國民道德の大敵である、武器を持つて居るもの計りが敵ではない、昔から城外の敵を破ぶるは易し心内の賊を滅ぼすは難しと云ふてある、心にある疑の敵は城外の敵より恐るべきもので退け難

きものである、若し疑の心起らば愈々の場合に於て卑怯未練な振舞をする様になる、平時に於ても各其任務に就て居つてもそこに缺陷を生ずるのである、故に忠義一徹に自分の任務に盡すことの道德的價値を心得置くべきである、日本の粟を食ひ日本の水を飲む以上は此忠義の心に疑を懐いてはならぬ、宗教家や學者の中に怪しきものがあるが此等は日本人ではない、日本人である以上忠義の心を持たねばならぬ、日本臣民たるの義務を知らねばならぬ事は帝國憲法に示されてある、忠義が世界文明の中に於て旭日の如き光輝を放つて居るにも係らず、此を知らない學者や宗教家が近來増々殖へて來たのは實に遺憾千萬の事でありませぬ

何故忠義の心が必要であるかと云ふ様なことは説明するまでもありませんが、少し申述べて見ますれば、一體我國は忠義に依つて立つて居るのである、普通に國と云ふのは領土があり人民があつて、之れを統一せらるゝ王様があつて國家が出来て居るのであるが、我國は神世より此國を治めらるゝには何の考もなしに治

められては居らぬ、皇祖皇宗が此國を肇めらるゝ時より、チャンと立派な理想目的があつて我國が建てられてあるのである、其理想目的即皇宗の皇謨は御皇室に於て代々守らせられて來たのである、此理想を形に顯はして三種の神器として御皇室に御傳になつて居るのであります、此を道德の意味で申せば尊き意味が含まれて居るのであつて、世界の人類を救ふ大理想であります、天皇陛下に忠節を捧ぐると云ふことはこの大理想大精神を擁護する御爲である、軍人は形の上より御皇室を擁護し上るのであるが、此大理想を備へない爲めに億兆一心の力を以て擁護して行くので、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるのは、それが一人一人の力てなく、日本人全體が一致結合して強き力を以て顯はれて來て國の大精神大目的を擁護するのである、此大目的を擁護せんが爲めに皇宗を中心として、御皇室に忠義を捧げるので、御皇室を擁護する事が、即ち内に日本人七千萬人を保護するのであつて、進んでは世界の文明を扶翼し世界の人類を導いて行くのである、



若しもこの大理想を破らんとするものがあるならば、戦争をしても譲つて行くので、軍人に賜りし御勸諭の中に

「汝等皆其職を守り、朕と一心になりて力を國家の保護に盡さば、我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬべし」

と示されてあるのは、この御趣意であると拜察し上るのである、各其義を守つて天子様の御心と一つに成ると云ふことは、建國以來の大理想の下に結付いてそれが神様の思召と一致して、清い立派なる精神より我國を護つて行くので、我國の蒼生、即ち人民は太平の幸福を得、國の威烈は世界の光華となつて光り輝くであらうと御示しに相成つたのであります、我々が命と共に護らねばならぬ此大理想は、我等の祖先が忠義と云ふことを忘れずその結合の力に依つて開國以來未だ一度も國威を傷けられたことなく、故に今日の我々も我々の子々孫々も此忠義の心を受け繼いで我國光を世界に輝かさねばならぬ、之が日本人の覺悟である、

これが爲めに我々は生きて居るのである、若しも此大精神を奉ずる事が出来ぬならばそれは國賊である、己人々が小さな事をイクラやつて居ても、此大理想大目的を忘れてやつて居るならばそれは眞の日本人でない、茲に於て忠義の心の大切であることが明白に解るのである、互に國民同志が助け合ふて行くのは忠義の心であるが忠義の心で國を守り國民を救ひ、世界の文明を資け人類を救ふて行くのである、故に忠義の心は、一切の道徳を統一したる最も高い道徳であると云ふことに成るのであります

此意味を理解した偉人として山崎闇斎先生のことを考ふべきである、先生は儒者であつて孔子孟子の學を學んだ人である、或時弟子共を集めて若し孔子を大將とし孟子を副將として數萬の軍を率ひて此國を攻めて来たならば貴様はなんとするかと問はれた、處か弟子共は之に答ふる處を知らなかつたが、先生は孔子だらうか孟子だらうか日本へ敵對するならば皆擒にして仕舞ふと言はれたと云ふことであるが、此は道徳上の戰

争を起して來ることで、孔子でも孟子でも大和魂の前には双向ふことは許さないと云ふことである、宗教も其通り禁令も釋迦様の御説きになつた尊い教でも大和魂の中には包容せられて行くのであります、處か佛教が日本に遺入つた當時は其事がわからないので、大和魂を佛法の方へ引付け様と考へたのであるが、忠義の道徳が最高のものであることは傳教大師も弘法大師も充分に御了解になつて居なかつたと見へる、日蓮上人は國に合はない法は打捨てべしと云はれた、「佛法は國を鑑みて弘むべし、彼國によりかりし法なればとて此國にもよかるべしと思ふべからず」と云はれた、佛法を學ぶ人にして斯る事を言はれたのは日蓮上人の特色であります、耶蘇教でも此點に気が付いたならば善くなるのである、日蓮上人の様な人が耶蘇教に出たならば、耶蘇教も亦此國の爲めになり大和魂と一致することになると思ふ

曾てブリス大將が來た時、日本國家をブリスに獻ずる杯と言ふた白痴がありました、日本の道徳は西洋の

道徳より低いと考へて居るから起るので、大誤解である、時間を守らないとか便所を汚すなどと言ふ様な小さな道徳は、日本の方が普及せぬ様に見えるかも知れぬ、それも眞の武士は時間を違へるとか、便所を汚すと云ふ様な事は無い、人間の最高の道徳は國家結合の力を通ふして顯はるので、忠義の心を其最高點に置いたのが我國の道徳である、此が世界に冠絶して居る所以である、此理想は不思議な意味合で顯はれて居る我日本の道徳は大陽を理想して顯はれて居る、國は日本と名付けられ、神様は天照大神と申され、國旗は日の丸と定められた、若しも日が出なければ人は仕事が出来ない、仕事の出来ぬ計でない人は生きて居られぬ太陽の力は凡ての根本である、その太陽を我國の理想としたのは大に意味のあることで、外國には星や龍や鷲を用ゐたものもあるが、我國が太陽を取つて其理想を顯はしたのは實に不思議と云ふべきである、新田義貞の教訓として傳へられてある中に「忠なさに於ては萬能何の益かあらん、當家にては進んで死せず退げども



生きず死生必ず期あるべし、晝より夜に入り夜より晝にうつるが如し」と言ふて居るが、一度決して戦に臨んだ上は勝つも負くるも運を天に任せるので、其根本は忠義に存するのであると云ふことを言はれて居るのであります。此忠義の心を全ふするには堅忍の働を缺いてはならぬ、何處までも遣り遂げると云ふ覺悟を必要とする、如何に忠義の心があつても之を遣り遂げると云ふ決心が無かつたならば、其忠義の心は効を奏せない、人の心と云ふものは其決心の如何に依つて随分目覺しい事を爲し得るものである、熱いも寒いも決心に依つては感覺の違ふものである、頼朝が其弟範頼に焼いた金盃を持たしたが範頼は其金盃を平氣で持つて行たと傳へられて居る、此は其堅忍の意志の力でありませぬ、昔から鈍刀骨を絶つと言ひますが、精神の力により鈍刀にても骨を絶つことが出来る、此精神に力を込めて飽きてやり通すと云ふ決心は、總て最後の勝利を得るに就て最も大切な事と思ふ、先帝の御製に

器には随ひながらいはほをも

とほすは水の力なりけり  
くろがねの射し人もあるものを  
貫き通せ大和こゝろを

堅忍の心を教へられたのであります、勝海舟伯の俳句に、「咲くや梅枝は天下に十文字」他の花は寒さに引込れて居るが、梅は寒さを凌りて天下に咲ほこつて居ると云ふことで、矢張り堅忍の志を詠んだのである、ボックストーン氏曰く「強者と弱者、偉人と凡人、人間の大差異は志氣にあり堅忍不拔の決意にあり、目的一度確立せば後は成すか死すかの二つあるのみ、之なくば才能も境遇も機會も、兩脚の動物をして人ならしむることを得ざるなり」と、人間でありながら非常に強い者と又非常に弱い者との別がある、遠く大砲の音を聞いて飯が食へなくなつたり小便が出なくなるものもある、萬世に光を殘す偉人もあると同時に豚か犬の様に喰ふてたゞ眠ることしか知らぬ奴も居る、斯様に分れるのは何に因るか、一に志の如何に依つて分れるのである、堅忍とは志氣の働である、志を立て

てたならば貫き通すことが必要である、若一貫機せず爲し遂げねばならぬ、日蓮上人は此點に於て實に吾々に尊ぶべき教訓を與へられて居る、上人は建長五年立教開宗以來約三十年の間は殆ど迫害と戦つて居られたのであるが、一難來る毎に勇氣を増し不屈不撓其迫害に對抗して初一念を貫徹せられた、其堅忍の働は今日の心弱き人々の尊ぶべき教訓であります、商船學校の練習艦大成丸の船長の話を聞きますと、全船が世界一週の途に上りました際、百日余も陸を見ないことがあつた其際に乗組人員百八十名の中で六十人から病氣に罹つた、其原因は食物の關係も幾分はあるが、主なる原因は精神である、精神が腐敗するから身体も病氣に罹るのであると話された、戦争の時も戦死者よりも病死者の方が多しのは、精神の弱い事が大に關係することと思ふ、志氣旺盛であるならば病氣は多くの場合退治することが出来るのである、人にして堅忍の志を缺いたならば、これ兩脚の動物をして人たらしむること能わずとは格言である、人は何事に就ても一度決心し

て成し遂げんと目的を確立した以上は、爲すか死すかの二つより外には方法はない、若し其決心が無かつたならば、如何なる順境に居つても爲し遂げらるゝものでない、况や逆境に於ては無論成効するものではない、ありませぬ

昔大鹽平八郎熊澤春山杯と肩を並べた人物に三輪執齋と云ふ先生があらました、元此執齋先生は京都の生れてあつたが、あまり家柄の能きものではなかつた、依つて壯年の時志を立て、江戸に出て、参りました當時の江戸は今日の東京と同様に政治學問の中心と爲つて居りました故、成効せんと欲するものは皆江戸へ修行に参つたのである、其時に執齋先生の友達に大村彦太郎と云ふがあつて、此も共に江戸に出て、見たいと云ふたので、兩人して江戸に來た、そうして執齋先生は學者に爲らんと志し、大村彦太郎は商人と爲つて成効しようとする方針を定めたのであります、處が兩人共江戸に知人があつてはなし何の的もないのであるから銘々が其方法を考へ出さねばならぬ、依つて兩人は



今日より三年の後に日本橋の上に出合ふこととし、それまでは相互に奮勵して各自全力を擧げて働かうと云ふ約束で袂を分ちました、それから三年立つて同月同日に兩人が日本橋の上に會合致した、處が其時は執着先生は或儒者の門に入つて勉強して、先生の代講をする様にはなつて居つたが未だ成效した譯ではない、大村の方も或商店に住み込んで番頭にはなつたが未だ名前が知られる程にはならない、そこで亦三年を約束して分れた、それから三年の後日本橋の上に出合ふた、其時に執着先生は一人前の先生と爲つて三十人餘の門弟も出來て居る、大村も一商店を構へて番頭や小僧の三四十人も置く様になつて居つたから、双方が其連中を引連れて日本橋の上で會合して相互の住所を知らせて其成效を祝したと云ふこととあります、此大村彦太郎と云ふが今の白木屋の先祖であると云ふこととあります、此二人の如きは最初志を立て、最後迄貫き通ふした人であり、又或書物に出て居ることとあります、或處に百性の息子があつた、それが或農家に奉公に出て居つた、處が其子供の十八歳の時に非常な

飢饉に出遭ふて、奉公して居つた家でも人減しと云ふので暇を出された、何分飢饉の事であるから今の食物にも困難すると云ふ有様であつて、ボンヤリと考へ込んで居つた或時雪隠に這入つて居ると、傍でガサガサと云ふ音がする、氣を付けて見ると傍に切り葉がある、其中に雀が入つては何か捜して居る、人が居るものがあるから、一寸捜しては逃げて行く、亦來ては仕舞に其葉の中から一本の實の付いて居るのを見付け出して、或吳服屋に奉公をして五年の間に三十兩の金を作つて、其金で吳服物の端切を買求め、此を袋物に作つて賣り歩き、遂に賣子を澤山置いて賣らせる様になつて立派な商人になつたと云ふこととあります、如何なる難事でも精神を込めて行なれば必ず成效するのである、故に萬事は心が根本となるのであります、今や國家の一大事に當りては、國民銘々の精神生活を豊富にして、能く久しきに耐ゆるの力を養ひ、一意以て國運の發展に力を盡さねばならぬ、それが軍國民の務むべき大事なる點であると信じます

# 大日本帝國と日蓮上人

唯一佛敎團長 清水 梁山

日蓮上人は「名の芽出度は日本國扶桑國なり」と仰せられて居るが、名は必ず體を現はすもので即ち名の中に深重の意を含んで居るのである、日本と云へる國號自體には絶對の權威を有するのである、然るに日本人にして名の尊さを知らず深き意義あるを知らずして、對立國家の上に日本を理解せんとするは以ての外のものである、日蓮上人はこの深い理義を明にされて居るのでありまして、上人の遺文を拜することにより其卓識に敬意を表せざるを得ないのであります、次に帝國と云ふ意味を申し上げます、宏遠なる理想を有する尊嚴な君主政體を帝國と云ふのである、而してこの理想が中外に施して悖らず古今に照らして謬らざる宇宙一貫の大道であつて、その雄大なる意義を含んで居

るのが大日本帝國である、西洋の諸國に於て大の字を加へて居りましても、眞に帝國と云ふ事が出来てありましようか、帝とは人間ならざるもの、即ち天業を恢弘する地位に在るものが帝國である、又萬世一系とは如何なる意義なるか、世の教育家の説く所によれば我國は祖宗以來變はることなく萬代の後までも絶ゆることなきが故に萬世一系であると云ふて居るが、之等は未だ憲法の精神に思ひ到らざるものである、斯かる淺薄なるものでない、萬世一系の理義明かならざれば國家の尊嚴を維持することが出来ない、萬世一系とは血族的及道義的一系である、非憲法上の萬世一系とはこの血族的と道義的と一致して始めて一系と云ひ得るのである、若し單に血族的關係のみなれば絶對の意義



は無いのみならず、種々の學說思想によりて破壊せらるる虞れがある、彼の社會主義の如き思想を以て日本の皇統を視るるやうになつて甚だ危険なる状態を呈するに至るのである、故に單に時間的なるのみでなく空間的にも一系でなければなりません、即ち時間的には神武天皇第一代より今上天皇百二十二代と數ふる上に一系の意義を存し、空間的には代々の天皇悉く一系である、横に論ずれば如何なる時でも萬世である、時間空間を貫いて居るから萬世不易である、今上天皇に對しまでも神武天皇に對しまでも同じく萬世である共に不死不滅の御方である、故に時間的に血族關係を以てのみ萬世を論ずるは、未だ憲法の精神を徹底せざるものであつて、横に空間的に道義的に萬世の意義を明かにせねばならぬ、之は天照大神の皇諷に「天地と共に窮りなかるべし」と仰せられしに基くので、我國は天地と共に不滅である、道義的には天地と窮りなき公道であるのでありまして、この公道と王道との一系を立てられたのである、即ち天地の公道と無窮の

天道之を名けて萬世一系と云ふのである、故に天皇は天地の公道と共に明確にして普遍的道義的なるを以て萬世一系であるのであります、斯かる甚深玄妙の理義を含んで居るのであるから、萬世一系を皇家における血族系のみと考ふるのは誤りである、日本人は天地の公道を體せる國に臣民として生存するものなるが故、臣民も亦萬世一系である、此事は皇祖の遺訓に「我御子の知召國」とあるに依りて明かである、既に萬世一系の君たるべき國なれば、其國に住する臣民も亦必ず萬世一系でなければならぬことは勿論の事である、「我御子の君たるべきの國」との仰せは、日本國民の懸有感銘すべき事である、而して等しく萬世一系なれども君臣の秩序を誤ることを許さぬ、君は萬世の後まで儼として君である、臣民は何つまでも其分に在りて臣民である、君臣の名分明かにして微塵だも動かすことは出来ぬ、社會主義者の如きは君臣の秩序を誤るものであるから、極力之を排斥せねばならぬ、親は絶対に親である、子は親に變ることは出来ない、頭は上に足は下

に在る、若し足が頭の代りをして果して出來るのでありましようか、決して其位を犯すことを許さぬのである、之れ即ち我日本の萬世一系である、天地公道と道義を君となつて行ひ、臣となつて行ふのである故に我國は血族的道義的に萬世一系にして永遠に變る事はない、然るに我歴史中にこの皇統を汚さんとした者がある、即ち弓削の道鏡である、之は和氣清磨と共に忘るべからざるものである、道鏡に就ては何宗であつたか不明である、或は俗人が假僧せしものとも思はれる、彼の時の僧として姓を弓削と云ふ筈がない、弓削は官名である、私は眞言の僧であらうかと思ふ、道鏡の名字なきは眞言には名字がない、眞言は祈禱を主として居る、道鏡の惡事も稱徳天皇の御祈禱より起つて居ると信ずる、日蓮上人は眞言に對して亡國と叱咤せられたが、亡國の証には弓削道鏡を出せば尤も適切なる

次に天皇と云ふ神聖の意義であります、この事を理解致さねば統治權を論ずる資格がない、設へ西洋の

思想に精通して居つても、日本の法を知らざれば憲法を解する事は出来ぬ、天皇は支那の文字であるが、我國には「スメラギ」と云ふ、「スメラギ」の意を解する時は、西洋思想に陥る如き事は無い筈である、然らば「スメラミコト」の意味はと申しますると、總べさせ給ふと云ふ義である、「ミコト」は統治の命令の事である、即ち統治の大權と云ふ事である、統治の大權既に天皇にありとせば、天皇の外に國家ありと云ふ様な説は起る筈がないのである、「スメラミコト」の天皇統治權を總攬し、天壤無窮の萬世一系なる事明かである、次に大日本國の意義である、大日本國の裏には小日本がある、之は日蓮上人の御遺文に依りて知るのて、我國を一には小なる日本國と云ふ、即ち「僅かの小島」と仰せられてある、我憲法に大日本と云ふは地上の小大を云ふのではない、理想の根元に遡つて大日本を意識するのである、然れども小日本を離れて大日本は無い、我等の見る小日本が天地と同ふする大日本である、之を名けて我等は萬邦一國と云ふ、全世界に國を成すもの



多しと雖天性其まゝなるは獨り大日本あるのみである  
 小なる形が小日本である、この小日本が大なる天國に  
 して萬邦一國たる天皇が統御せらるゝので、この萬邦  
 一國を宇内一君と云ふのである、宇内一君と云ふ、大  
 日本である、一言に云へば天國である、天は極めて大  
 である、我等は此日本は萬邦一國であり、我君は宇内  
 一君である事を深く信ずるのである、此の意味に於て  
 憲法を理解せねばなりませぬ、即ち皇祖皇宗の教の儘  
 が憲法と顯はれるのである、故に維神の教たるを信ぜ  
 ざる間は正しく憲法を解する事は出来ぬ、而して萬邦  
 一國宇内一君は道義の根本に依つて統一する、宇内に  
 は軍に一道のみである、一道を以て國とする故に萬邦  
 一國と云ふを得るのである、故に我日本は世界を大統  
 する君であらせらるゝ、また臣民もさうである、然るに  
 世の學者識見低くして建國の本義を知らざるもの甚だ  
 多く、憲法上に謬見を挿んで理義を不明ならしむるも  
 のがある、之れ實に誠むべくもたれざるべきとてある  
 爰に日蓮上人と日本國との接觸を窺ひまするには、

られて居りますが、外國には設へ主の權と師の權あり  
 とするも、吾が子と云ふ親の徳を具へて居らない、我  
 國は主師親の三徳を圓滿に備へて居る、此の三徳具足  
 の先天的因縁を味ふことが大事である、支那の忠孝論  
 の如きは根本に於て價直がない、忠は君に對し孝は親  
 に對すると云ふことに分離して居る、日本にもこの思  
 想が這入りて居る、故に忠ならんと欲せば孝ならず、  
 孝ならんと欲せば忠ならずとの泣言が出るのである、  
 眞に忠なるものは孝であり、孝なるものは忠なるもの  
 である、之れ日本獨特の眞意義である、而して子とし  
 ては絶対に親に服従すると共に、天皇に絶対服従を爲  
 さねばならぬ、忠孝は分れて居るのでなく其頂點に  
 於て一致する、支那や西洋とは全然其思想を異にして  
 居ることを知らねばならぬ、この思想は國民教育の上  
 に、兒童の精神より注入して行く様にせねばならぬと  
 おもふ、然るに忠孝を別物として教へて居るから、現  
 代は親に對して孝道を盡すものが尠ない、又親も自分  
 の親である意義地位を忘れて居るものが多い、眞に上

法華經の根本教義に依らねばなりませぬ、法華經に、  
 今此三界皆是我有、其中衆生悉是我子、而今此處  
 多諸患難、唯我一人能爲救護

とあるますが、此の文は憲法第一條の意味を明示し  
 て餘りあることと拜する、統治の大權は、此の主師親  
 を以て論ずるを適格であると信ずる、我が有と云ひ、  
 吾が子と云ひ救護を爲すと云ふ、佛は此土を領土とし  
 て居る、此の土の外に佛の土は無い、即ち佛は此土の  
 主である、又一切の衆生は皆佛の子である、佛は我等  
 の親である、而して佛我等を救護し給ふは即ち師の恩  
 である、一佛にして主と師と親との三徳を具へて居る  
 而して吾人の見を以てせば、この思想及事實は遺憾な  
 く憲法上の大權を説明し盡したものであるとおもふ

我有主 我有師 救護師 救護權 吾子 親 吾子 親  
 前記の如く日本天皇の大權は、主の主義に於て我有の  
 權あり、師の救護權を有し、親として吾子權を具へて  
 居る、日蓮上人は、總ての他の佛にはこの主師親の三  
 徳を具せず、唯だ我釋迦牟尼佛のみ三徳を具ふと仰せ

に親あるを知つて至誠を盡すのが眞の忠孝である、只  
 單に肉的に結合した親の子であると満足して居る人な  
 らば、何うして眞の孝を遂ぐる事が出来やう、又之等  
 の人がいかにか眞の忠を爲し得やう、眞の忠も爲し得  
 んものは親に孝を爲し得るものでない、此忠孝兩全の  
 思想の解らね様なものは、必ず家庭に於て道徳生活が  
 出来るものでない、日蓮上人は既に六百餘年前、この  
 國家的道徳を發揮する爲に大運動を爲されて明かに指  
 導されて居るに拘はらず、今尚ほこの思想が行はれて  
 居らぬのは残念に堪へざる所である、今や國家多事な  
 るの時、眞の日本人としての精神を發揮し、至誠皇室  
 を思ふべきの時である、而して眞の日本人となり眞の  
 皇室を思ふ人は、直ちに日蓮上人の教ゆる所を味ふべ  
 きである、日本人は宜しく上人の教義を信じて帝國の  
 眞意義を體得し、日本人としての信念に住して奮勵せ  
 ねばなりませぬ  
 今こゝに憲法を日蓮上人の宗義に配すれば、大日本  
 帝國は十法界にして、萬世一系は久遠本佛である、大



日本帝國は萬世一系の天皇之を統治し、十法界は日本の天皇之を統治する事となる、之れ實に本佛實現體に於て斯意を憲法上に現はされたこと、信ずる、然るに一は我天皇を知らず、又久遠の本佛を知らざるもの、多く日本國に生活して居ると云ふことは誠に遺憾の次第である、天皇に對する忠孝は、久遠本佛に對して身命を惜まざる處に、眞に忠孝の人と成り得るのであります、日蓮上人の三大秘法は、憲法第四條の精神を根本的に明かにされたものであると思ひます

△天皇ハ國ノ元首ニシテ 本門之本尊

△統治ノ權を總攬シ 本門之戒權

△此憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ 本門之題目

となるのである、故に甚深なる上人の教義を研鑽して第一義に到達し、その透明なる識見を以て憲法の根本眞意を明かにし、皇祖皇宗の建國の大精神を實現することに努めらるゝことを望む次第であります

### 林將軍を喪ふ

九月四日、天晴會員陸軍中將林太一郎君の葬儀、青山齋場に於て儼肅なる日蓮主義者の法式を以て営まれた、軍國多事なるの秋、この名將軍を喪ふ、颯爽たる雄姿を陣頭に、全軍前への號令を聽くを得ざるを悲しむ、あゝ、將軍深く偉大なる日蓮上人の人格に感孚し、卓越せる日蓮主義者の生命を味識せる熱烈なる信者であつた、將軍はその教義を理解せば必ず自から之を行ひ、而してその法悦を他に傳ふるために熱心なる運動を爲された、この事は本年三月號の本誌に、日蓮主義と名士と云ふ題下に紹介して置いたが、いさはは亡き人となつた、さても人生無常の足なみのはやさ、再び日蓮主義者としての將軍の音容に接することは出来ない、あゝ

明治四十四年九月十六日、天晴會は九段偕行社樓上に、將軍が北海道第七師團長に赴任せらるゝを以て送別會を開いたことがある、席

上姉崎文學博士は送別の辭を

北海は我主義の上に關係の深い地である、爰に當年の日持上人の精神を移して以て今日の中將閣下の精神といふも過言でない、故に我々は北門の鎖鑰たる旭川に林、中將の榮進は、遠く且つ大なるものあることを期待するのである、願はくはこの心を以て北海に向はれんことを、さるにても童顔げにも懐かしき吾黨の布袋様と暫し相別れんとす、無量の感慨に打たるゝものがある

と述べたことがある、後、將軍北海道に在りて軍人將校及全道の識者と圖り、畢生會を起して全道の風教を刷新し、健全なる思想を示して人心の歸向を明かにせられた、確かに北海に在りて日持上人の遺志を繼承し身讀せられたのである、將軍によりて北海の人心は救はれたのである、この自行化他に亘る精神の發動は、如來の事を行ふたものである正しく菩薩である、菩薩の心こそ日本軍人の精氣である、また大和魂の真相である、將軍の如きは健全なる國民性の精華なる大和魂

を發揮せられたものと謂ふべきである

武斷一返の軍人ならばあまり頼むに足らぬが、思想の整ふた將軍の如きは眞に得難き人である、いさはは亡き人である、我等は再び吾黨の布袋様と相會して語り合ふことが出来ない、おもへば將軍を北海道におくりしは四年前の九月であつた、いさまた題目を唱へて將軍を吊ふも九月である、この間甚だ深き因縁の存するを覺ゆるのである、あゝ

大正二年の春、師團長會議の爲上京したる際、天晴會は統一閣樓上に晚餐會を催したことがある、將軍は北海道における風土人情などを述べ、さらに語を大いに「今は之と云ふ土産はありませぬけれども、やがては何か御土産を持つて來て皆さんの御目にかけていとおもつて居る」と言はれたが、今から考へると畢生會設立の事であつた、將軍は少しも前觸れはしなかつた不言實行主義である、こゝに何とも言ひない尊とい人格の力がある、將軍逝いていさはは亡きも、國民精神を訓練すべき大事業を起されたのは、神明照覽の下に、武人の動績と共に光りは永久に輝かむ(三上生記)



# 近代文明と帝國の天職

文學博士 姉崎正治

近代の文明は複雑である、この複雑なる文明の中には、大切なものもあれば又怖るべきものもある、之に對しては毛嫌をしてはなりません、堂々と進んで行つて怖るゝ所なく、若し弊害が伴つて来るならば吾々の力で之を對治する覺悟がなければならぬ、唯日本國內で此害を除くと云ふばかりでなく、勞働の問題資本家の問題、或は無政府主義の問題の如く、外の國でも是が解釋に苦しんで居るならば、日本も世界と共同する必要があり又日本には此等の害に對して特別の力があるならば、斯の如き弊害思想を消滅させる一つの模範を示すと云ふ覺悟を以て掛からなければならぬ、模範を示し世界各國共に其例に倣ふと云ふ標本を與へる、是は吾々に取つて若し出來得るならば實に愉快な

仕事であらうと思ふ、此近世文明の中の色々な弊害に苦しんで居るものを、此國に於てそれを退治することの出来る一つの立派な方法或は思想を實地に起して、それが果して効果のあるものであつたならば、それを外國に供給してやつて宜い、恰も傳染病研究所で血清材料を拵へて病氣になつた者に送つてやると同じく、例へば無政府主義は怖ろしいものである、日本では無政府主義に對する薬が出来上つて居る、それを取りに來いと言つたならば誰でも喜んで来るに違ひない、其薬を我が日本國が作出だすことが出来るや否や、それは要するに我が國家の實際が如何に開發するかと云ふ問題に依つて決せられることである、而して此場合に斯の如き天職を帯び、此を理想として進むためには今日

の文明を頭から終ひまで毛嫌ひをしてはならぬ、其様に狭量な考へて居つたならば、斯の如き効力のある薬を發明することは出来ない、吾々は何所までも今日の文明の大勢を受け入れ、それを我が日本國の命に依つて消化して、其中から斯の如き力を出して來ると云ふことを考へなければならぬ、それを我が日本國の抱負にしなければならぬと思ふ

斯の如く申しますれば、將來に對する空想を言つて居るやうに思へる、吾々は果してさう云ふことが出来るや否やと云ふことは問題であるやうに聞こへるかも知れない、併ながら茲に吾々が唯之を空想で言つて居るのではないと云ふ根據があります、即ちそれは我が日本國と外の國と異つたる特別な特徴と云ふことである、保守的の國家の生命には根本の原理と、それに應ずる所の有ゆる變化進歩の力と二つあつて、此二つが最も完全な融合が出来、複雑と統一と、事と理と完全な融合が出来たならば、この國家は即ち生命力の盛な國、建國の基礎の確かな國である、此日本國に果して

此二つの方面がどれだけ備はつて居るか、今迄にても現在にても此二つの方面を我が國民はどれだけ備へて居るかと云ふことを考へて見る必要がある、國體の内容に就ての色々な議論は略して、國體と云ふことは簡単に國家の生命或は國家の生命の原理と申して置きます、此國家の生命の原理は建國の初めから定まつて居る、それより以來所謂時に消長あり、多少裏面の變化はあつても原理に於ては變つて居ない、但し國體に對する解釋は色々あつて、個々違つて居るのである、日本國が二千五百年間續いて來たのが國體だと云ふ考へもあり、又此國民が皇室と人民とか同じ先祖から出たから此國體が鞏固であると云ふ考への人もあるやうである、是等は勿論全然誤つて居るとは申されませぬ、併し私の考へではさう云ふことは未である、もう一つ本の原理がなければならぬ、其原理は何かと言へば極めて簡單であると思ふ、國家と云ふものゝ原理が此國の生命に現れたのである、是は日本國のことを考へるよりも、外の國と比較して見れば明白



である、何所の國にても其國の生命となる原理のある點は定まつて居る、彼のロシア建國はごく近い數百年來のことでありすが、其建國の原理としては東羅馬帝國の帝位を繼承したロマノフ家の帝位が此國を支配すると云ふことである、イギリスではウキリヤム征服者以來の王位が、國を支配すると云ふことになつて居る、もう一つドイツの如きも神聖羅馬帝國の帝位を繼承するものであると云ふことになつて居る、アメリカにしやすれば自由主義、人民の自治自由を保つ爲に聯邦を造ると云ふことが建國の大體になつて居る、フランスに致しますれば、自由平等博愛の主義を行ふ爲の國家であると云ふ建國の主義を持つて居る、是が各々建國の主義としては存在して居る、此が各國の國體國家生命の原理である

日本國の主義として言ひますれば、皇室を中心として大八洲の統一ある國家を造り、君は民に對して獨り君たるのみならず、又慈父であらせられる、吾々人民は臣下であると共に君に對しては子である、血族がど

人民の皇室に對する敬愛の情は誠に篤く、親愛の情拂すべきものがある、然し國主は權威の源泉でないから尊嚴に於ては不足がある、日本の立憲政體をイギリスの通りにしやうと云ふ人はこの點を考へてほしい、兎に角君臣の親愛 此はイギリスの特色である、吾々も是は大に尊敬すべきものと思ひますが、日本のとは違ふ、アメリカの國體に就ても同様であつて、その建國の理想には大に尊敬すべきものがある、各々自由を求めて得ざるものが自由の天地を造り出す爲に集つて來た、其精神が一つに結晶して獨立の宣言となり憲法になつて居る、國を造り上げた元が其所であるから、即ち自由を許し自治を許し、國と云つても各洲各個人の集つて出來た國と云ふことになつて居る、是がアメリカ建國の精神であります、それを他の國に移し換へると云ふことは勿論出來ないことであるが、アメリカの立場としては大切なことである、それから又ドイツの今日の皇位は、昔のシャーレーマン以來の位を襲いて居ると云ふことになつて居て、其精神が國民の團結

うなつて居るか知らぬても此情を以て之に對する、又弟子として之に對する、總て日本國に現れた教は皇室から賜はつた教であり君を師匠と仰ぐ、即ち君臣父子師弟の關係がある、此關係を國の生命として實際に現はさうと云ふ、此の主義が日本建國の理想大體、即ち日本國家の生命の原理と謂ふべきものである、各國とも各々建國の原理の無い所は決してありませぬ、人は往々にして國體と云ふことは日本だけにあるかの如くに考へて居るけれども、國體の無くして國家の存在して居る所はないが其國體の内容原理に至つては、各々違ふのであります

ロシアの建國は上が本になり、下が末になつて出來て居る、日本で日本の憲法を解釋して、天皇を統治權の主體とし臣民はその權力に服役するとする人があるが、此はロシアの建國を以て日本の國體を解釋する處に見てある、又イギリスでは君主と人民と殆ど對等て共に治めるといふ主義になつて居る、今日ではイギリスの君主は征服者ではなく國家の榮譽の代表者であつて

を促して、普佛戰爭の場合に國民的精神が非常に發揮したのは矢張り其力であつた、今日も各地に對抗があつて分れて居るに拘らず、帝國として統一を得て居るのも亦其爲である、各國ともさう云ふやうに比較致しますれば、何かの點に於て國家生命の原理があつて、それは其國民の立場として尊ぶべきものがあると云ふことは勿論である、それ故に國體と云ふのは日本のみにあると思ふ如きは大きな誤である、但し國體の内容如何といふことは、一步進めて研究すべき問題である

日本の國體は先程申した如く君臣一體となり、君臣が同時に父子であり又師弟である、茲に人倫の大本を盡して居ると云ふ點がある、人間世界の所謂道德關係には色々の點がありすが、之を儒教の如く所謂五常で別けて君臣父子夫婦と別けることも出来る、色々に考へることが出來ませうが、人間の倫理の關係を悉く約めて見れば、權威を尊重すると云ふこと、慈愛を以て相結ぶと云ふ此二點に歸着するのである、權威のある者に對して之を尊敬すると云ふこと、慈愛を以て相



結ぶと云ふ二つが圓滿に行はれる、其所に人生道德の最も麗しい點が現れて来るのである、唯慈愛だけであつたならば、例へば甘い母親が子供を可愛がるやうになつて仕舞ふ、唯權威のみであると日本の警察官の如く唯コラ／＼と云ふやうな風になつて仕舞ふ、此二つが如何なる方面に於ても兼ね備らなければならぬ、此二つが兼ね備はつたものが先程申した君臣の關係と親子の關係とさうして師弟の間に現れて来るのである、之を別けて言ひますれば、君臣の關係は即ち國家に於て之を事實に現はし、親子の關係は家族に於て事實に現はし、師弟の關係は主として學校に於て現はす、斯の如くにして人倫の根本である所の權威と慈愛との關係を實際に大に現はして来るのは、國家家族學校と云ふ仕組が世界に出来て居るのである、此區別を立てれば立つることが出来ませんが、若し是等の意味機關を一つにしたものがあつたならば、即ち其所に人生の最も大切な意味が統一して現れて来ることになつて来る國家にして家族の性質を備へ、家族にして學校の性質

を備へ、學校にして又國家の性質を備へる、此三つを一つにした何物かの形があつたならば、それは人生を最も完全に造り上げる所の機關である、而して此三つのものを事實に現はすことが出来るとすれば、それは即ち國家の生命に依つて造り出すより外はない、さうして其國家が即ち同時に家族たり學校たる性質を備へて居る國家であつて、乃ち始めて人生を完全に統一する國家であると言へる、然らば其國家の君主たる者は君であつて同時に親であり師匠である、其臣民たる者は臣民であつて同時に子であり弟子である、其意味と事實が擧がつて来たならばそこで始めて其國家は完全なる人生の機關と云ふことが言はれるのである、斯の如きは即ち日本建國の由來とその後の發展とに現はれて居る事實であつて、聖徳太子が一體三寶の原理でこの國家を統治する原理を明かにせられたのはこのことである、歴史の上に於て色々變化はありますが、此關係は國の生命の原理として動かさずに居るのである、動かさずに

居ると申すと、或は世の中の歴史家などの中で、さう云ふことを言つても歴史は色々變化して居るではないかと云ふことを申しますけれども、其所は初め申しました事と理との關係である、事に於て色々動く、動かない國があつたならば死んだ國である、動きつゝそれが一貫して来たと云ふことが、實に大切な點である、此君臣の關係に就ては申す迄もなく之を太古の神話から見ましても、天照大御神は此國を知ろし召すべき君主を定め、その君が初めから君臨なされて居る、初めから光り麗しく天地を照し給ふ神が此國の君主となつて、所謂八百萬の神が之に歸降した、是が國の本を現はして居る吾々の理想的の神話である、神話と言ふと氣にする人がありますが、神話と言つて少しも差支ないと思ふのであります、神話と云ふものは決して作り話と云ふやうな軽いものではない、國民の理想の結晶したものが即ち神話である、其根本に立つて其理想が所謂事實になつて現れて来て、皇室と人民との關係が生じて居る、之に就ては歴史上一々申す時間はありま

せぬが、最も此君臣の關係の薄らいだ暗くなつた時代を考へて見れば最も明白であると思ふ、即ち君臣の關係が紊れた時代があるとすれば、それは日本國の生命が餘程弱つた時代、日本が病氣に罹つた時代である、其最も病氣に罹り最も衰弱した時代はいつてあるかと言ふと、足利の時代で殊に足利の末に至つては、其極に達し將軍は天子を蔑ろにし奉つり、其將軍は下の執權から愚弄され、其執權は其臣下から愚弄されると云ふやうに非常に亂態を現はして居る、此時代は一々私が此所で申すも恐ろしく又思出したくはないのであります、兎に角足利時代に非常な衰弱の状態であつた其状態の時を見て来れば、人に依てはそれだから皇室の尊嚴と云ふことはアテにならぬと言ふかも知れませぬが、吾々は却てそれであるから皇室の尊嚴を殊に感ぜざるを得ないと言ふのであります、彼の南北朝以後足利氏獨り榮へ、それから足利氏も行けないやうになつて、足利氏は源氏の長者であつたからそれだけの心があつたが、それから後は下から



這上つて来た者が勝手をして何をするか知らぬ、口にするも恐ろしい話でありますが、あの場合に皇室を犯さうと云ふ者があつたならば、力の上から言へば何でもないことであると思ふ、斯う云ふことは今申すのも恐ろしく感じますが、併し吾々は其所まで考へて宜いと思ふ、例へば室町時代の東都の御所の有様を考へて御覽なさい、そこらの大名が勝手をして居る有様を考へて御覽なさい、皇室の御有様は實に申すも恐ろしい有様で、此場合に何人と雖も此皇室が日本國に無くて宜いものであると云ふやうな考を若しちよつとも起した者があつたならば、それを實行することは何でもなかつたのである、それ程になつて形の上には如何に衰へて居つても、其表面の有様は如何にあつたにしても、其時に矢張り皇室に對して神々しい感じを持つて居つて、何人も之を犯す心もあつたはなかつたはだけではどうしても消へなかつたのであります、どうしても消へなかつたのでありますから、其間と雖も皇室に關した方面は餘程衰へたやうであつたけれども、外

の大名で高家もあれば山名家細川家もあるが、それ等の者は皆権花一朝の夢で續々倒れて仕舞ふ、其時局をならべて見れば京都で一番微弱なのは皇室であつたらうと思ひますが、其一番微弱であるだらうと思ふ皇室が、少しも害を御受けにならずに唯續いて居てなつたばかりでなく、苟も志のある人が出れば其尊嚴を回復しやうと云ふ意氣込は何時でもあつた、信長が出て來ても、秀吉が出て來ても、苟も志のあつた人ならば、又力のあつた人ならば之を回復しやうとしたのである、是等の點は思出すのも忌はしいやうでありますが、此所に吾々の歴史を見た上に於て實に感動せざるを得ない所がある、他の國の王室或は大名なかに於てはあれだけに形の上には於て弱い状態になつて居られたならば、續いて居ると云ふことはない、然るに日本國のは續いて居るだつてなしに、形の上には如何に微弱であつても、津々浦々に至る迄人の心の底を叩いて見れば、矢張り皇室を中心とする心は失はなかつた、それでありますから信長でも日本全體を支配しや

うと云ふ時には、京都に這入つて皇室を守り立てる、それを旗印にしなければ日本國を支配することが出来ない、秀吉もさうであるマア言つて見れば日本國も一度病に罹つたのである、罹からなければそれに越したことはないのであります、病に罹つて却て健康の状態になつたやうなものであつて、非常に危篤の状態になつて殆ど脈が有るか無いか分らぬやうになつたが、矢張り脈があるので是が再び回復したのであつて、此點が吾々の信仰を強める力を吾々に與へる、君臣と云ふ方面はそれだけである

それから親子の情から申しましても、單に血族關係に依つてさう云ふ關係が出来て居ると云ふだけになしに義に於ては君臣たり情に於ては父子たりと云ふことは古今を貫いて日本國の生命を支配して來たのであります、それから師弟と云ふ上に於ては、是は崇神天皇の詔勅もあるが如く、民を導く所の元は教化にありと仰せられた如く、皇室が人民を導いて居て居てなるのは唯力てなさるのではない、いつても其所に主義があり

方針がある、それに依つて人民を導くと云ふ教化の意味が加はつて居る、聖徳太子が憲法を定められたのも、建國の大本が備はつて居ると同時に今日の倫理教育も備はつて居る、大化の新政にしてもさうである、皇室と人民との間に隔ての出来た時はそれが曇つたことがある、隔てのない皇室と人民と直接に接し得る時代があつたならば、臣民は子孫として君父を仰ぎ門人として主師を仰ひて居るやうになつて居る、師として門人に對して權威があると共に慈愛を以て臨むと云ふ師匠である、弟子の方からは之に信服し、師は之に對して敬愛の情を以て對すると云ふ大切な關係を持つて來たのである、明治天皇の勅語にも、拳々服膺シテ君臣ソノ徳ヲ一ニシヤウと仰せられてある、その勅語を以て單に命令の如く解釋する人の如きは、實に先帝の御心を知らず、皇室の意味を知らない人である、即ち此三つは我が日本國民の生命で實現すべき人倫の大綱であつて、それが國家生命の大本であると共に又國民生活の理想であります、勿論この生活は時に依



つて消長はあり、形の上に見れば消長はあつたのですが、原理に於て一貫して居る、吾々は此の一貫した原理に日本の國體を置いて見なければならぬ、日本の國家は此三つの關係を兼ね備へて居る、然らば其「家」の下にある家族は、家族として適當に又此三つの關係を備へて居る團結でなければならぬ、親と云ふのは、唯子を生んだと云ふ親でなく、矢張り其家族を率ゐるのに君主の權威が無ければならぬ、それと共に對子の慈愛は勿論であるが、又教育の意義も備はらなければならぬ、學校に於ても同様で、學校に於ては師の弟子に對する關係は、親の慈愛と共に君主の權威を兼ね備へなければならぬ、今日の教育に於ては、往々にして唯知識を授けたり知識を受けたりする傾向があるが之れではならぬ、學校はその制度組織に於て、同時に家族的又國家の形を現はした學校でなければならぬ、即ち建國の大本を主義とし、それを根本の理想と仰ぐ精神が學校の精神になつて、其學校の中には師弟の關係は權威から見れば君臣に似た關係であり、又慈愛から見

れば、父子の關係であつてそれが一團になつて行くべきである、日本國は一つの大きな國家として、此三つの關係を備へて根本原理を命として居るならば、其國の中に存在する團練殊に家族、學校尚ほ其他の團練にしても、此主義此理想の現れた團練が致る處に現れて來なければならぬのである

國家の斯の如き生命を根本としますれば、則ちそれは國家の生命の原理であり、國民の活動がこの原理の統一の下に盛に動き、而かもその大本が變らない力となつて行つたならば、其所へ受入れて來る色々の勢力又其中に起る變化は、如何に複雑であつても、如何に變化し進歩しても、其變化たるや意味のある變化になり、其複雑たるや統一の複雑になつて來るのである、斯の如き國家の生命を大本として、近世文明を入れて來ますならば、本當の團練進取の實を擧げることか出來る、本當の團練進取の實と云ふのは初めに申しました意味で、此國民生命の根本を明かにし、さうして今日の文明に乘出して世界の文明を入れると云ふのみで

なく、此國に取入れて此國の文明を作り世界を感化するの勢力にならなければならぬ、其力になるのは此國家の生命、國家の原理が確乎として存在して居るが故に、其所に有ゆる材料を取り集めて來たならば、それが消化され特別なる文明が出来るのである、同じ世界の文明の中に泳いで居ても、其中に特色ある日本國の近世文明が出来、それが又同時に世界に對して何等かの感化を與へなければ止まぬと云ふ力になるのであります

此日本國の生命には統一と複雑との二面があつて、此國家の生命が根本になり、有らゆる變化したものを受け入れて世界の文明と歩調を共にし、又同時に世界を感化する、斯の如くしなければならぬと云ふのが大體の私の結論であります、其結論を尙ほもう一つ譬喻で申上げて置きますが、其譬喻は法華經の藥草喻品の譬喻であります、其譬は斯うである世界の中に澤山な樹木がある、或は大きな幹或は小さな葉のものもある、黄い花白い花もある、甘い實の生るもの酸い實の生る

ものと色々あるそこへ天が油然として雲を起して雨が降つて來れば、其の有らゆる大中小の樹木は潤ひを受けて、各々其能力を發揮する紅の花は紅、白の花は白、各々一味の清風を受けて其能力を發揮する、それと同じやうに世の中には色々の人間がある、又物も澤山あるのであります、太陽の光が一度照らしたならば其光は一つであるけれども各々の實は其光を受けて成長し、各々のものは其光を受けて色々の香を發つと云ふ譬喻であります、是は何でもない吾々が毎日見て居ることであるが、吾々日本國の生命を説明するに足る譬喻であらうと思ふ、日本國の生命は即ち斯の如き太陽の光が萬物を照して萬物其命を得、天から降る一味の雨が萬の草木を潤はして之を成長せしめると共に、上には君たり親たり師匠たる皇室が天日の如く、天照大神の御末を承けて在りまして居る、吾々は今後幾億萬年を経て、其長所に應じて或は雨、或は日の光を受けて成長して行く、此所に日本國の生命がある、即ち上御一人と下萬民、是が一つになつて、燦爛たる文物を呈して日本國の生命は繁く昌へるのである



傳は人とし  
偉大なし

### 頼春水の人格

この頃、或る取調への必要より頼山陽の日本外史を讀んだ、そこで山陽の人格や識見は既に世人の知る所であるけれども頼山陽を産んだ父の人格及びその家庭は未だ世に紹介されて居らぬ、山陽の如き人物を作つた父の人格を窺ふ事は修養上の資料となる事とおもふ、依てこゝにその人と爲りを掲げて参考に供しようと思ふ。(三上生)

頼山陽の父は頼彌太郎春水と云ふ人で、備後竹原と云ふ所の産れてある、竹原と云ふ土地は藝州の領分内て、其地の染物屋であつた、其染物屋が頼春水の生れた家である、親の職が染物業でありまして男の子の兄弟が三人であつた、總領は春水其次が杏坪末子が春風でありまして、この三人は何れも有名な大家になられたのでありますが、山陽の父春水は、十一歳の頃或る日親子の名代で名主役場へ地子錢を納めに行つた(地子錢とは宅地)そこで、當時の名主役場と云ふのは、大概疊を敷いた日本座敷で名主と組頭と云ふ者が居る、町方には組頭が四五人で地子錢の徴集を致して居る、春水子供の事ではあるから何う云ふ處へ出してよいか分らぬから、遠慮もなく上つて行つて名主の座つて居

る前へ着座し、そうして地子錢を出した、所が名主は非常に怒つて「不埒な奴だ、小前の分際として名主役や組頭の上に座るとは不届な奴だ」と、拳を固めて二度丁とばかり撲られた、春水ワット泣き出して其儘跌で逃げて歸つた、そうして父に其話をした、父は我々分際で名主様とは同席の出来ぬものである、それを組頭や名主の上に行つて座るとは以ての外のことである、名主の立腹されたのも無理でない、お前が惡かつたのだと懇々諭して其日は済んだが、春水甚だ残念に思ひ替々として沈み勝てある、そこで父親も少し不審であつたから或日のこと春水に向つて、「此頃の様子では何か氣分が勝れぬやうだが、此の間名主に撲られたのが残念であるからであらうけれど、さりながら之を見返さうと云ふには、我々風情の紺屋職人では到底出来ないこと、意外な立身をせなければ駄目である立身をするには學問をして學者なり醫者なりに成らなければ、名主の上に座つて今日の恥辱を雪ぐことは出来るものでない、若し學問をして學者にならうといふ

氣があるならば違つて見たらどうだ、學費は自分が備いて充分積けよう」と云はれたので、春水大に喜んで或寺院へ頼んで四書の素讀から始めた、所が恥を雪がうと云ふ一心が凝り固まつて居るから、他の子供とは違つて非常に勉強もするし上達も早い、僅か三四年の間に四書五經文選などの素讀が終へると云ふことになつた、そこで今度は何處かへ行つて立派な先生に就いて修業しようと思ふことになりました、然るに其頃備前岡山に西山拙者<sup>せつしや</sup>と云ふ儒者があつた、そこで或人の紹介を得て岡山の西山塾に這入つた、之は大きな塾で藩のものは皆入塾して居る、大分盛んで二百名以上も居つたと云ふことである、此の塾で學んで居つたが勉學の動機が子供心に恥を雪ぐと云ふ一念の火が燃えて居つたから、五年程居る内に謙れも及ぶものは無い位に進んだ、西山先生より一家を開くだけの學問が上達したことの證明を與へられて、大阪へ參つて塾を開きました、其時は二十四五歳であつたと云ふことであるが、大阪に塾を開て教授を以て任せて居りました所が

當時大阪には、柴野栗山、尾藤三州、古賀彌助と云ふ幕府の三儒大家が居りまして、此人達が一舎を結んで混沌舎と名けて居りました、混沌舎と云ふのは大阪で非常な勢力であつたやうであります、所が藝州藩で儒者を一人抱へたいと云ふことになつて命が大阪に下りました、其時分は大阪に諸家の藏屋敷と云ふものがあつたので、國元の藩から留守役に然るべき儒者を見立て、抱へよと云ふ命令がありました、留守役は其頃名聲の高い柴野栗山の方へ參つて、本藩で御身を抱へたいと云ふから承諾して貰ひたいと申込んだ、然るに柴野栗山は、自分は阿州徳島藩へ出入を致して扶持を戴いて居るので、御藩へ仕へると云ふことは出来ませぬが、私共よりも學問の深い人で頼彌太郎と申す人があつた方が宜しう御座いませうと返答をした、栗山先生は頼春水の發憤の動機も聞いて知つて居る處から機會もあつたならば推挙をしようと思つて居る處からあるから、頼りに頼彌太郎春水を薦めた、留守役は、



「頼と云ふ者は學問はあるとの事ではあるが本藩の方で満足をしまい」と言つて受付けない、栗山先生熱心に春水の勝れて居る點を擧げて、「世間の俗物の言ふ所は當てにはならぬ、世間には餘り現はれぬけれども學問の深いことに至りては、我々の到底及ぶ所でないから責任を帯びて推舉する次第である」と言はれるので留守役もそれではと國元へこの事を通告に及んだ、國許では評議の結果大阪の人氣如何を捜るがよからうと云ふので、忍び目附か参りまして搜つて見ました所が如何にも學問の深奥を極めて居るばかりでなく、實際躬行主義であることを分つたから、斯かる人ならば召し抱へると云ふことになつて、三百五十石を以て藝州藩の儒者と相成つた、そこで直ちに大坂を引き拂つて愈々藝州に歸ることになりましたが、郷里の竹原の方では寄ると觸るとこの評判で持ち切つて居る、今度紺屋の息子の彌太郎と云ふ者が、名主さんに撲れてから奮發をして學問を修行し、大坂に門戸を開いて居つたが、今度藩へ召抱へになつたと云ふ名聲が噴々とし

て響き渡つた、驚いたのは頼春水を撲つた名主である彼れが來たらどんな仕返しをせらるゝか知れぬ、コラコウしては居られぬと言つて密かに逃亡して仕舞つたが、頼春水は藝州藩の儒者として碌三百五十石を食むもの、紺屋の息子としては破天荒の立身である、この地位を得たる頼春水、日を経て郷里竹原に下つて行つた、親族故舊は以前に變る誇りと尊敬とを以て迎へた兩三日を経てから親族故舊に向ひ、是非自分の恩人に謝さなければならぬことがある、是から御禮に行つて参じようと言ふので、一同は驚いて、その恩人とは誰れのことであるかと尋ねると、春水先生は、其恩人と云ふのは自分が幼少の折無禮を働いた、め頭を撲つた名主のことである、自分は彼の名主に撲れたのが立志發憤の原因となつたので、人に劣らぬ刻苦勉學をしたのもこの事があつたからである、實に得難い恩人である、こゝに御禮をしようとおもつて輕少ながら進物等を調べて参つた譯である」述べられたので、一同はそれは思ひも寄らぬことである、實は昔しの彌太郎が出

世して歸ると云ふことを聞いて名主は何處かへ逃げて仕舞つたと告げた、そこで人を以て此の旨を名主の宅へ申し入れると、諸方を搜がして漸く名主の所在が分つたので、春水先生館を立て供人を具し、所謂本藩儒者の格を以て乗り込んだ、昔しは無禮な奴と叱り付けた名主も、今は本藩の儒者を迎へるのであるから、下座に低頭平身して一言もなかつたが、春水いさは昔しの事など語りて厚く禮を述べられたので、故郷のものは春水のやさしき情と徳とに感じて、春水を尊敬せざるものは無いと云ふことになつたさうである、春水立志の動機は、古來偉人傑士の半世の歴史にあることであるが、その單簡なる動機が發憤努力となり、遂に一藩の學校の教官となるを得たと云ふ事實は、大に修養上の参考となるべき力があると思ふ、そこで春水先生大阪に居りました時、高崎藩の篠田儀平といふ人の娘を娶つた、春水の妻は篠田の二女でありまして、姉は尾藤二州に嫁いだ、それで藝州へ下る前に妊身して居つたが、藝州へ参ると間もなく産れたのが即ち頼

徳太郎山陽である、そうして山陽十七歳の時、藩の門閥家より妻を迎へる時は、既に七百石の碌を食み、藩の教授職中上席を占めて居つたと云ふことである、兎に角其親は一職人であつて紺屋である、この紺屋の息子が發憤の結果は一藩の教授職に進み、其子頼山陽は傑出の才を以て雄大なる筆を揮つて日本外史を書いた山陽が十八歳の時に書いたと云ふ「新策」を見ても、天下國家を治むべき政策を論じて居るが、山陽自身の下稟であつたことは勿論ではあるけれども、またこの父春水の家庭的教育訓化の力が至大であるとおもはれるさうして傑物山陽の子供は三男一女で、三男が三樹三郎であるが、之も國を憂ゆる志士である、何はさて共に敗け氣嫌の氣風を貰いて居る、この精神系統を調べると、大に得る所があると思ふ







▲本欄は日蓮主義が王権冥合の理想實現を期するがために其熱心なる運動の實況を報告して意氣ある日蓮主義者の態度を明かにするものなれば所屬宗派を問はず事實を正確せらるれば之を掲ぐべし

▲本化記者團 日蓮主義は不健全なる思想を拆伏し開顯すべき特權を有するされば記者團は筆と辯論との力を以てあらゆる不健全なる思想の魔軍を攻撃しつゝ在るは既に世の識る所なるも此の軍國多事なるの秋さらに國民の堅實なる思想と忠愛心とを熱烈ならしむるの急務なるを知り反國体思想の開顯を行ふべく九月六日日本橋小傳馬町身延別院に於て大講演會を開いた此日は特に門前の大廣告に『基督教を廢す質問自由』と大書して置いた午後一時幹事三上義徹君

増加しつゝありと又柳井津町窪田利兵衛氏宅にて岩國町長久寺にては數々講演會を開き能仁一十師之を擔任して教線擴張に努めつゝありと云ふ

▲宇都宮 安國會は第六回例會を八月十六日商業會議所に開く麥倉幹事開會を宣し平和的動物の題下に師子王頂言を朗讀し加藤文雄君は『信仰の人』に就て日蓮主義の眞髓を發揮せられたり來會者は青木中學校教諭伊藤女學校長中野法學士山本女子師範主事小原市課長等二百餘名にて盛會なりき同日午後八時宇都宮公園二宮圖書館樓上に講演を催ふし麥倉幹事開會の辭を述べ加藤講師は『日蓮主義者の修養』の題下に熱辯を振つて修養の本源を明かにせられたり(同館は新開理事官の厚意により會場に充つるを得たり)十七日は歩兵第五十九聯隊慰問講話を行へり當日聯隊副官眞野大尉の案内にて集會所に休憩し千村少佐の挨拶あり同

は開會を宣して『宗教に對する國民の態度』に就て個人格完成の上より國家自衛の上より基督教を論駁し新聞智啓君は『日本民族の理想と豫言』と題して世界統一の天業は日本人の雙肩に擔ふ一大事業なる所を明かにし加藤文雄君は『根から枝まで』と云ふ題下に其佛兩教の教理的比較より立論して基督教の神自體の救済力なき所以を明かにし高鍋日統君は『日本の國體と一神思想の衝突』に就て建國の理想を鮮明して國民道徳の本源を説き基督教の神の思想は日本國に容るべきものにあらずと斷定せられ各辯士の熱烈なる萬丈の光焰は聽衆の肺腑に徹底するものがあつたと信する聽衆中には牧師らしい人も見うけたが秩序の正整たる日蓮主義の折伏には双向ふ力も無いと見えて猛烈なる熱辯にノウの一言をも發し得なかつた

▲天晴會夏期講習會 本誌前號に廣告の如く九月一日より一

週間片瀬龍口寺に於て開會し熱心なる聽衆ありて多大の効果を收めたりと尙ほ同會にては六日鎌倉俱樂部に公開講演を開き小島存省師の開會に次て山田博士小原陸軍少將柴田一能師の講演ありて三百餘の聽者は傾聽感動したりと云ふ

▲大阪 西高津中寺町蓮成寺に於て八月十八日施餓鬼を執行し午後二時梶木日種師は『人生觀』と題して信仰の基礎の上に實生活を營むべき所以を説き信念助長に力を與へたりと云ふ

▲廣島 大橋日襲師は時局と日蓮主義との問題に關して七月以來新川場町本照寺に松川町妙詠寺に吳教會所に可部町設教所に其他信徒の邸宅に於て毎月七八回の講演を開催し軍國民の士氣作興に努め信仰の重要な所以を發揮しつゝありと云ふ

隊講室にて將校參列下士一般着席加藤講師は『王道に就て』と題し建國の大精神と日蓮主義の使命との因縁及世界統一の天業に關して詳細に論明せられ自覺と感動を起さしむ次て森大尉の謝辭あり此二日間巨る講演は宇都宮市民に甚大なる感化を與へたるを信す

▲大崎大學 内北陸學友會は夏期休業を利用して巡回講演を爲せしが學生藤井教諭和田壽玄古河俊影小林身延學院教授山田博士の一行は越後高田大漁座に越中滑川町中吉座に魚津町眞成寺に富山市女學校に氷見町氷見小學校に高岡市小學校に金澤市天晴會に於て日蓮主義の特長を發揮して地方人心に復活の靈水を灑ぎたりと云ふ

日蓮聖人要集

發行所

日宗新報支社

定價 特製金七拾錢 (郵税四錢) 並製金五十錢

本書は御遺文中の重要な立正安國論以下五十餘篇を輯め總て傍訓付となしたるものにして上人の人格及教義を研鑽せんとするものには非無くてならぬ書と云ふべし總六號字にて七百七十頁の袖珍本ならざるものと雖研鑽の志あるものは、また未だ入らざるものと雖研鑽の志あるものは、本書を懐るにするを要す

日蓮宗專門法商

東京淺草三好町二

出張店 草木 伊助

本店 草木 伊助

草木 伊助

▲如何なる御誂にても品質を精選して迅速仕立候上御届可申候



# 法華經講義

洋裝全二冊二千餘頁  
定價金參圓郵税金十六錢

本書は本多大僧正が心血を瀧いて著されたるもの、日蓮主義を研究せんとするものは必ず本書を一讀して甚深の妙義を味ふべし、未だ本書を讀まざるものは速かに右に供へよ

# 國民思想講演輯

一冊金三十五錢  
郵税四錢

本輯は本多大僧正の第七師團第十五師團の講話にして、軍國民の必讀すべき有益なる良書也、僅かに十數部あり、若し申込遅く買損ふて悔ゆる勿れ

東京淺草區北清島町十四番地

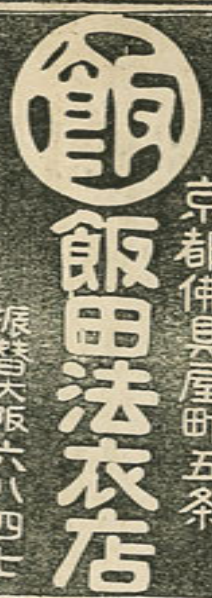
統一團

## 日宗法衣専門

青雲帽 希教服 袴

此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条



振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さざる自然の特徴を有し候  
小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御満足迄誠意見本を提供し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價

廣告料

雜誌及廣告料金拂込

東京小石川白山前町十七番地三上  
美濃無替口東京二八八四〇番へ  
拂込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候

▲讀者の特權——本誌讀者にして日蓮主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字詰に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし(但し採否は編輯者の權内とす)

▲講演の需めに應ず

本誌讀者にして國のため人の爲め日蓮主義講演會を開かんとするものは御申込次第何時なりとも應諾可致候(但し旅費は實費だけ)

大正三年九月十五日印刷發行

發行兼編輯人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上 義徹  
印刷人 鈴木 日

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團  
編輯所 東京市小石川區白山前町十七番地 (電話下谷六千三百十番)



◀ 書 き べ す 讀 必 の 民 國 軍 ▶

天晴會講演錄

（第貳輯）（價格金貳圓也）  
 （郵税金拾貳錢也）

▼本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるもの、日蓮主義が眞理批判の上に。また國民思想教養の上に。殊に國家存立の關係に於て、如何なる地位と權威とを有するかは。須らく本書六百餘頁に亘る金玉の文字によつて之を知るを得べし

内容  
 林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生  
 辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生  
 田中智學先生等の講演也

精神の修養

（各一部 金貳拾錢也）  
 二部 小包 金八錢  
 一部 郵税 金六錢

本書は本多日生師の海軍大學校における精神講話にして。帝國軍事教育會に於て印行したるもの。思想問題に注意を拂ふものは必ず本書を一讀せざるべからず

▲申 込 — 東京市小石川區白山町十七番地 三上 義徹。送金は（郵税金拾貳錢也）

軍國と日蓮主義

大僧正 本 多 日 生

乃木將軍二年祭に詣つ 記者

生の戰と日蓮主義

三上 義徹

▲七と云ふ字と國難 ▲一切を武裝せり ▲山陽母に奉ずるの動機 ▲活動史

日蓮主義と日本

僧 正 野 口 日 主

統 一

號六十三百二第

號 月 拾

法 華 色 讀 論

時局と心理

女子大學教授 高 島 平 三 郎

顯本法華宗 大學 林 教授 關 田 義 叔